立教大学外国語教育研究センター開設記念シンポジウム

グローバル社会で「生き抜く力」を育てる外国語教育

2020年8月30日（土）オンライン開催

急激に変化するグローバル社会の中で、子どもたちは知識・スキルだけでなく、自ら課題を発見し、批判的に考え、他者と協力しながら課題解決する力を身につけることが求められています。「主体的・対話的で深い学び」を推進する新学習指導要領の策定や大学入試制度改革など日本の学校教育が大きく変わろうとする中、英語をはじめとする外国語教育はこれからどのような方向に向かっていくのでしょうか？

立教大学では外国語教育研究センター開設を記念して、これからの時代に子どもたちがたくましく生き抜く力を育成するために、外国語教育が果たすべき役割について考えるシンポジウムを開催しました。

1. 基調講演「グローバル社会で『生き抜く力』を育てる外国語教育」坪谷ニュウェル郁子（株式会社東京インターナショナルスクールグループ代表）

1.1 講演（要旨）

1.1.1 日本人の英語力は低いのか？

「日本人の英語力は低い」という声がしばしば聞かれる。その理由として、日本人は間違えるのが嫌い、目立つのが嫌いなど国民性を理由に挙げる人もいれば、日本社会では英語を使う必要性がないからという意見もある。また、学校の英語教育を理由にあげる人もいる。それぞれもっともなところがあるが、はたしてそうしたことだけが理由であろうか。

アメリカの国務省の基準では、英語母語話者にとって外国語としての日本語は最も難しい言語の一つであり、CFERのB1レベルに到達するのに2,760時間かかったと報告されている。また、私が運営している学童保育で実験的に500時間、1,000時間、2,000時間、3,000時間での子どもたちの記録を取ってみたところ、3,000時間の時点でB1レベルに達していた。

一方、日本の小学校、中学校、高校での英語時間は全て合わせても1,000時間弱が一般的である。さらに、日本の学校の1クラスの生徒数は、OECD加盟国の中で最大規模に近い40名である。このクラスサイズで英語授業が1,000時間に満たないという現実を見ると、英語教育や日本の環境や国民性の問題というだけでは済まないのではないだろうか。

1.1.2 国際バカロレアの最終試験

国際バカロレアには上級コースと標準コースがある。標準コースの最終試験は、1）言語と文化、2）報道と文化、3）将来の課題、4）世界規模での課題、5）社会的課題、6）文学の問題の6つのカテゴリーで構成される。

例えば、「言語と文化」では、「時間の経過とともに言語の何が変化したのか、その変化は良い変化か、悪い変化か？」という問いである。こうした質問に対して、英語で解答が求められる。「報道と文化」では「マスメディアによって強調される固定概念には何があるのか？」、「世界規模での課題」では「全ての国はその国ならでは課題がある。総理大臣もしくは大統領に世界規模での課題に目を向けさせるため、あなたならどんな論理を使って納得させますか」といった問題である。こうした問題に対して、外国語である英語で、論理を組み立てて自分の意見を記述していく。これが国際バカロレアの大学入学審査における外国語試験である。

一方、日本の大学入学試験では空欄補充や選択式による出題が一般的である。私はここに外国語習得の1つの大きな課題があるのではないかと思う。穴埋め・選択式の試験が求める能力と、国際バカロレアの記述

式の試験が求める能力には大きな違いがある。「あなたが生きている間に起こると思う変化について、最重要と思われることを2―3あげ、なぜそれらが重要であるのかを説明しなさい」という課題に対して、それに関連する知識を使い、論理的に考え、結論を出す力を持ち、さらにそれを外国語で表現し、コミュニケーションを取っていく。国際バカロレアの最終試験で求められるこのような力は、これからの社会でも求められる力ではないだろうか。

1.1.3　教育の目的

Educate（教育をする）という語の語源の1つに、「引き出す」という意味がある。つまり、それぞれの人が持っている輝く部分を見つけて引き出し花を開かせる、それが教育ではないだろうか。その花が開くことが、私たちの所属する社会への貢献である。そして、社会に貢献することによって、私たちそれぞれの人生も充実する。それが教育なのではないか。

35年間、私はたくさんの子供たちと出会ってきた。その中で確実に言えることは、子供たちは私たち人類の未来だということだ。教育は子供たちを変える力がある。つまり教育には未来を変える力がある。そのことを信じてこれからも教育を行っていきたい。

1.2　質疑応答

新多：（2020年）4月からのコロナ禍の中で、どのように東京インターナショナルスクールでは対応されたのでしょう。

坪谷：かなり以前から、東京インターナショナルスクールではICTの活用が学校生活の一部になっていました。生徒たちはリサーチもレポートも、学校から貸与しているPCやiPadなどを利用して取り組んでいます。

スタディーログもあり、各生徒の記録もそこに残されていますし、それを保護者が見ることもできます。保護者とのコミュニケーションも全てオンラインでやっていくという形を取っていました。今回、2月の27日に安倍総理から学校を閉めるようにという指示が出てから、2日間だけ教員たちにどのようにオンライン授業を回していくのかという研修をした後、3日目からは全面的に普段の授業どおりにオンラインでの授業が始まりました。

とてもスムーズにいき、大きな問題はありませんでした。ただ、あえて問題をあげると、私たちのところは年長さん（4歳児、5歳児）の子から学校が始まっていますので、「何時になったからこれにログインして」と子供だけで行うことは、なかなか難しいところがありました。生徒の時間管理を保護者の皆さんにご協力をいただかなければならなかったという点が課題としてありました。

新多：これから始まる9月からの授業はどのような予定をされてますか。

坪谷：すでに学校の新年度が始まり、ほぼ全ての生徒が学校に戻ってきています。子供たちの顔が見られるので、私も毎日学校に行くことが楽しみなんです。

新多：ご講演の中で「自己肯定感を育てる」ということがとても大事であるというお話がありました。具体的に東京インターナショナルスクールで、生徒たちの自己肯定感を高めるために取り組まれておられることはありますか。

坪谷：東京インターナショナルスクールは、国際バカロレアのフレームワークを使っています。4歳児から6つの学際的な分野にわたっていろんな教科を6週間ずつ学習するというスタイルです。その学際的な分野・領域というのは、まず1つ目が「私たちって誰」、2つ目は時間軸・地理軸の中で「私たち今どこにいるの」、3つ目は「どうやって表現するの」、4つ目は「どんな機能、どんな役割しているの」、5つ目は「どうやって組織化しているの」、最後が「地球を共有する方法」です。

その中の「私たちって誰」という領域を例に取ると、自分自身の性質や信念・価値観、個人的、身体的、精神的、社会的、そしてスピリチュアルに健康でいるということについて考えます。また、文化圏、家族、友人、コミュニティーを含めた人間関係、権利と責任、人間であるというのはどういう

ことなのかという領域から–「普遍の真理」と私は呼んでいるのですが–コンセプトを選び、それに対して本質的な問いを投げ掛けます。その問いに対して生徒が追求していくのです。

例えば小学校５年生ですと、「学びって人間と他の世界を結び付ける人間の基本的な特性だよね」というコンセプトの下に、生徒に対して「学習って何？」、「脳はどんなふうに機能しているの？」、「人間は変化に対してどう反応しているの？どう行動しているの？」という問いが投げ掛けられます。それに対して生徒は、自分なりに探求し、自分なりの答えを出し、自分の言葉でそれを伝えていくということを行います。

４歳からずっとその教え方を続けていきます。そうすることによって、「自分って何だろう」ということが分かってくるのですね。そして、それが分かることで、「人ってみんな違うんだよね、違っていいんだよね」ということも分かるのです。ですから、自己肯定感を高めるために何よりも大切なことは、「自分って何だろう」という本質的な問いにしっかりと向き合っていくことなのではないかと私は思います。

新多：すごく本質的ですね。テクニックだけではなく、本質的な問いを繰り返し生徒たちに投げかけることによって、次第に自己肯定感も高められていくということですね。こういった授業・教育を行うことを通じて、教える側もすごく鍛えられそうですね、

坪谷：そうですね。先生方も生徒と共に自分のことをもっと深く深く知るようにもなっていくのだと思います。

新多：ご講演の中で、国際バカロレアの思考力を求められる試験に対応していく、というご説明がありました。日本でも大学入試が大きく変わろうとしています。なかなか思考力を問う試験を作る・実施すること自体が大変ですが、こうした試験に生徒たちが対応できるように育てていくということもすごく大変なことではないかなと思います。最終的にこの国際バカロレアの高い思考力を求められる試験に対応できるようになるために、普段どのような活動を行っておられるのでしょうか。

坪谷：「考える力」というのは基本的で大変重要な能力ですね。この考える力を身につけるためには、先ほども言ったように、普遍の真理、基本的で本質的な問いを投げ掛けることだと思います。そして、それを生徒一人一人がさまざまな手法で考えて、自分なりの答えに到達しなくてはいけない。それの積み重ねの結果、考える力が身につくのだと思います。

考える力を半年や１年間で育てるのはなかなか難しいと思います。本当にこうした問いかけを積み重ねていく作業の結果、身に付くことだと思います。大変な作業ですが、考える力というのは、私たち人間にとって、最も素晴らしい力でもあります。ですから、それぞれの学校で、それぞれの教育者・先生方が、考える力を自らも身に付け、そして生徒にもそれをシェアしていくっていうことも大切だと思います。

新多：今回のシンポジウムのテーマでもある、「グローバル社会で生き抜く力」として最も大切な力は何でしょうか？

坪谷：自分のことを理解して、自分が好きなこと、得意なことを自覚すること。そして、それを生かして、世界・社会がよりよくなる、より平和になることに貢献する、そういう人になりたいと思うこと。そしてそれを通して、自分の人生も充実させていく。そういう人になっていくということを、自分で理解し、それに向かって努力をすること。そうしたことが、これから先のグローバル社会で生き抜くために最も大切な力だと思います。

新多：ありがとうございました。貴重なお話をいただきまして、どうもありがとうございました。

2. パネルディスカッション「新しい学力観」X「英語教育」小・中・高 英語教育現場の最前線

しばしば英語教育では流暢な英会話スキルの習得が成果として期待されます。しかし、国外では数十年前から「主体的、対話的で深い学び」を目指した外国語教育が実践され、国内でもいくつかの学校において「新

しい学力観」（汎用的能力、コンピテンシー）を念頭においた英語教育が展開されてきました。

パネルディスカッションでは小中高の教育現場において先進的な英語教育を実践されている先生方にお集まりいただき、所属校の英語プログラムの特徴および日々の授業内容・方法についてご紹介いただきました。

パネリスト
- 正頭英和 氏（立命館小学校教諭（英語科）・ICT 教育部長）
- 小泉香織 氏（渋谷教育学園幕張中学校・高等学校教諭）
- Ian Daniels 氏（かえつ有明中・高等学校教諭、国際主任）
- 植松久恵氏（広尾学園中学校・高等学校教諭、インターナショナルコース統括長）

司会・進行
新多　了（立教大学外国語教育研究センター・センター長、教授）

2.1　各発表に対する質問

新多：これから４名の皆さまにお集まりいただき、質疑応答を始めたいと思います。

正頭先生からは、マインクラフトを使った非常に興味深いプロジェクトベースの授業を紹介いただきました。通常の講義型の授業や、練習をたくさん行うスキル型の授業では得られない、プロジェクトベースの授業のメリットは何でしょうか。

正頭：教科を学ぶ授業では、教える内容がはっきりしているのですね。つまり、答えがあるということなんです。１＋１＝２っていうのは、明確に答えがあるわけです。そこで、１＋１は２と教えてしまうのか、それとも「１＋１は何で２になるのだと思う？」という違いのようなものだと思います。

答えのあるものに対してどう向き合わせていくのかというのが、いわゆるこれまで教科を教えるということだと思っています。一方、PBL（Project-Based Learning）といわれるものは、単純に言うと、答えのないものにどう向き合っていくのかという「向き合い方」を教えていくものです。ですので、教師もどうなるか分からないようなものです。つまり、「どうなると思う？」って言われたときに、「さあ」としか先生が言えないようなこと。これからの世の中ではそういうことが増えてきます。一番の違いはそういったところにあるかなと思います。

子供にとっては、モチベーションが全然違うかなと思います。授業をしていて一番のキーになっていくのはモチベーションです。PBL は、ある程度子供たちのモチベーションが担保された状態でスタートします。子供たちの興味があることからスタートしていくので、当然と言えば当然ですが。そこが一番の違いかなと思っています。

新多：ありがとうございました。ご発表の中でも「生徒たちが前のめりになる」という言葉がありましたが、そのようにエンゲージメントが高まってくることが、授業の中ですごく感じられるんですね。

正頭：そうですね。逆に言うと、「高まっているものしかやらない」というところがあります。「やりたくないことやらなくていいし」ということかもしれないですね。

あとは、ちょっと後付けになるかもしれませんが、あんまり僕自身が PBL の定義とか、一斉授業の定義とかにあんまりこだわっていません。これは「PBL でやるぞ」と思ってやり始めたわけではなく、後から分析すると「PBL っぽいね」となっただけです。子供たちのモチベーションを起源にしてプロジェクトをスタートさせたというだけの話ですね。ですので、あんまり「一斉授業だ」「PBL だ」いう形に僕はそんなにこだわりがありません。何と評価してくださってもいいのですが、（結果的に）「PBL ぽいね」と評価されているということかもしれません。

新多：小泉先生の授業の中で、「生徒の主体性をとても重視している」というお話がありました。生徒が主体的になるように具体的に工夫されていることは何でしょうか。

小泉：私は最初の下地づくりと、生徒たちが安心して発話できる環境づくりを一番大事にしています。クラスで発言するということは、日本語であっても簡単なことではありませんので。それを英語でただ積極的にやりましょうと言っても、目的がはっきりなければ実現は難しいと感じています。

ですので、最初の４月の授業で、まず自分の体験を交えながら、将来生徒が英語を使う場面の話をします。例えば、私のイギリス留学時代に、周りがどんどん手を挙げて発言している中入っていけずにとても悔しい思いをしたという話をします。他には、ホテル勤務時代に英語を使って人と積極的に関わることがいかに求められていたのかという話もします。

その上で、生徒たちには、グローバルな舞台で堂々と活躍してほしいという私の願いを伝えます。そのためにはやはり自分の意見を発信し、他の人と意見交換をする練習を積み重ねていく必要があることや、将来の舞台に向けて練習できるのは今だからこそということ、また英語の授業こそがその経験の場になるんだという話を、最初にしっかりと伝えるようにしています。

それ以降は、生徒が安心して発言できる環境づくりを一番大事にしています。授業中に出てきた発言は絶対に否定することなく、必ず１つは具体的によかった点を取り上げて褒めるようにしています。ですので、授業中生徒が出してくれる意見はどんな意見であってもクラス全体にとって価値があるということを、繰り返し生徒に伝えるようにしています。

同時に生徒たちの間でも、お互いのよかった意見を褒め合うような機会を日々の授業の中に散りばめています。例えば、グループディスカッションやペアワークのときには、褒めたり同意するような表現のインプットを十分に与えます。その上で、毎回の授業では、生徒の発話量が教師の発話量を圧倒的に上回るような授業を設計しています。

そうすると生徒たちは、自然とお互いの意見を尊重し合うような雰囲気をつくってくれます。英語の授業では、自分たちが英語を使うのは当たり前なのだという意識を持ってくれるようになったのかなと思います。ですので、私自身が何か特別に工夫してやるというよりは、私が最初に伝えた思いを生徒が素直に受け止めてくれて、日々の授業の中で一生懸命頑張ってくれた結果のように感じています。

新多：（ダニエルズ先生の）いろいろ取り組まれているプログラムをとても興味深く聞かせていただきました。その中でも、中１・２年の基礎的な内容段階から中３の（高度な）英語に移るときに、どのような工夫をされているのかお聞きしたいと思いました。中３のところで、生徒としては少しチャレンジングな内容になっていくのかと思いましたが、そのときにどのような工夫や助けをされているのでしょうか。

ダニエルズ：小泉先生と同じようなところから始まると思います。まず、安心安全な場をつくるために、中1、中２、中３の最初に１年の目標をはっきりと生徒に話します。例えば、中１ならベースである A、B、C から始まるので、目の前にあることや、自分と自分の周りの世界について少し話せるように頑張りましょうと伝えます。何を勉強するかではなく、なぜその勉強をするのかについて素直に生徒と話し合いをすると、生徒はこれからの１年間をどう過ごしていくのか、よく見えてきます。

中１に入るとプラス１が少しずつできるようになり、それを中２につなげていきます。「アクティブコミュニケーション」と「アクティブリスニング」では、中１の最初の頃にパーソンを何にするかということ、そしてプラス１を付けるように促します。どんどんプラス１を付けると相手がそれを聞いてくれコミュニケーションが発展します。そして、相手と何か一致することが見つかるととても面白くなります。私はそれを聞きながら、何かフックをつかんでフォローアップしていきます。

中３に入ると「アクティブコミュニケーション、プラス１」ができるようになりますが、今度は単純にたくさんプラス１を付けるだけではなく、コミュニケーションは心から話すことが大切だということを伝えます。

例えば、中１と中２の ‘Have you ever been’ を教える授業では、‘I have been to Okinawa’ という話をします。「奥さんと一緒に３年前に行って楽しかった」と話そうとすると、いろんなことが心の中にあふれてきます。ですので、それを相手がもう少し理解しやすいように、「ビジュアル」、「シ

ンキング」、「パーソナル」を中心にしながら、「フィーリングス」をちょっと広げるように話します。頭から話すのではなくて、ちゃんと相手に伝わるように心から話すことができるようなストーリーが大事だと伝えるようにします。生徒にとって、最初は本当に難しいと思います。けれども「1年間頑張ると絶対うまくできるようになる」、「こういう感じでやると上達するよ」というように生徒と約束をして進めていきます。

もう1つ大切なポイントは、何かを褒めることです。今年の目標をセッティングすることも大切にしますが、ワークの中で見えたことを褒めることも大事です。例えば中1・2でワークをしたときに生徒がどんどんプラス1を付けると「ああ、すごいね」と伝えます。そうすることで、いろんなきっかけが見つかります。

中3では、英語が楽しいかどうかよりも、なぜそんなにサッカーが好きかや、なぜそのことを大切にしているかについて周りに話していることを褒めます。

そのように、1年の初め頃の話がすごく大切ですが、その中でワークを褒めると、生徒が「このクラスではこういう感じで頑張ることできる」という気持ちにつなげられると思います。

新多：何かコミュニケーションの本質を伝えているようなそんな感じがしました。ありがとうございます。

植松先生にはインターナショナルコースのSG（Standard Group）とAG（Advanced Group）の混合クラスをご紹介いただきました。とても面白いコースだと思いますが、実際には非常に異なる英語力の生徒たちが一緒に授業の中にいるわけで、なかなか運営上大変なところもあるかなと思います。工夫されておられることや、このコースの生徒たちが身に付ける力などについてお話しいただけますでしょうか。

植松：スタンダードグループのSGと、アドバンストグループのAGという2種類のグループがあります。この生徒たちの英語のレベルは確かに全く違いますが、SGは中学入試段階では英語ゼロベースで入ってきますので、その生徒たちの英語力を伸ばすことに注力すればいいレベルです。AGは主には帰国子女ですので、授業中は外国人から主要科目を学びます。ですので、通常授業のほとんどは外国人から学ぶインターナショナルスクールのような授業で学ぶAGの生徒たちと、日本のカリキュラムで、英語だけ少し特化したカリキュラムで学んでいくSGの生徒に分かれています。

それぞれのグループの生徒たちが身に付けていく力は様々あります。SGは、多様なバックグラウンドを持ったAGの生徒たちと時間を共に過ごしますので、英語力はもちろん付きますが、それ以上に他文化理解や、個性を出す力がより身に付いていくように思います。

そのSGが、入学時は英語ゼロベースで入学しますが、1年ほどで英検準2級、2級とどんどん取得していきますので、AGの生徒たちはそれに刺激を受けていると思います。それまで自分のために使っていた英語力を、学びたいと思っているSGの生徒たちに教える、人へ貢献するという観点が育まれているように思います。

新多：それぞれ得るものがあるところがすごく面白いなと思ってお聞きしていました。ありがとうございました。

2.2　コロナ禍での授業実施について

新多：このコロナ禍の中でどのように授業を実施されてきたか、ご経験をお話しいただければと思います。

正頭：子供たちが学校に来なくなったのは3月2日です。時の安倍首相が、もう学校での授業はちょっと難しいのではないかという話をされ、その翌週の月曜日が最後の登校日で3月2日から学校を閉じました。そうした中、全ての授業をオンラインで配信することを決めました。

その後子供たちが登校するようになったのは6月22日からですので、約3カ月か4カ月ぐらい子供たちは家庭で勉強しました。なぜそれが可能だったかというと、1人1台パソコンを持っていたことや、ICTを使った授業はすでに日常的に学校全体で取り組んでいたということが非常に大きかった

かなと思っています。

ICT 教育部長の立場から、先生方に対して決めたルールは３つだけです。１つ目は、授業動画を非同期型にしました。同期型の授業は絶対もたないと思いました。コロナは長期戦になりますから、同期型ではなくて動画配信型にしました。そして、45 分の授業をできるだけ短く、具体的には 15 分以内にしてくださいとお願いしました。授業の動画の内容は短ければ短いほうがいいですよっていうことを言いました。

２つ目は、授業をするときに先生の顔を出してくださいとお願いしました。パワーポイントを映してそこにナレーションを吹き込むという方法がありますが、それだと小学生の場合は集中力が続かず、聞かなくなると思いました。つまり、子供が知ってる先生が話しているんだよっていうことが動画の一番のメリットであるということです。

３つ目は、著作権です。意外と学校のリアルな授業は著作権に関して正直なところルーズな先生がかなり多いのですね。ただ、動画はアーカイブとして残っていくので、記録として残る以上そこに対しては最大限の配慮をしなければいけません。

この３点だけをルールとして作って、あとは先生方の自由な形で授業をしてくださいとお願いしました。

小泉：私は中１ですので、最初に対面授業ができないという問題に相当悩みました。同じ中１の教員といろいろ考え、やはり生徒全員に確実に教育を提供することを最優先に考え、６月までは授業動画を作って配信を行いました。本来ならばクラスメートと楽しく英語を使える時期に、自宅で１人パソコンの前で動画を見ることになる生徒のことを思うと、すごく胸が痛む思いでしたが、だからこそ、動画の中でどうすれば英語の楽しさを伝えられるのかを考えました。

オンデマンド動画でしたのでできることは限られていましたが、例えば私の海外の友人に協力をお願いして動画に一緒に登場してもらったりしました。他には、オーストラリアのホストファミリーがコロナ禍で子供たちの間ではやっている遊びの動画を送ってくれたので、その動画を使いながら、可算名詞、不可算名詞の説明をしたり。あとは学校が始まってから出会うことになる、ネイティブの先生の家族とインタビューを体験できるようにしたりして、何とか英語で世界が広がる楽しさを実感してもらいたいという願いで、生の英語に触れる機会を動画の中でできる限りつくりました。

ただやはり、私は生徒が主役となる授業を軸としてきたので、生徒の顔も見えない映像授業の期間はやりたいことができていない感覚がずっと続いていました。ただ、幸いにも６月以降は、段階的に対面授業が再開され、今ではマスクとフェースシールドを使いながらペアワークや発表活動もしています。

最初はやはり生徒たちはクラスメートもよく知らず、授業の中で声を出すことなどもしてこなかったので、英語の授業で声を出すことに不安を感じている子も多かったのですが、やはり英語を使ってやりとりをすることの楽しさを実感してもらいたいという願いが私にありますので、ゲーム性がある楽しい活動だとか、クラスメートのことを知れるような活動を重点的に入れていきました。

まだグループワークや教室中を歩きまわるような活動はできないのですが、安全な環境を確保しながら、できる限り今も英語を使ってクラスメートとやりとりができるような活動を取り入れています。ちょっと今はまだ暑いので、この状況でマスクとフェースシールドはすごくかわいそうですが、生徒たちもだいぶ慣れてきてくれて、今ではスムーズにペア活動を行ってくれています。

対面授業をしながら、やはり授業は生徒と一緒につくっていくものだということをすごく実感しています。マスクやフェースシールドの上からであっても、生徒の表情や反応は読み取ることができるので、そういった反応が、私が準備してきた授業に命を吹き込んでくれているような感覚があります。

やはり生徒の反応があるからこそ授業が発展しますし、何より楽しいものになります。生徒を見ていてもクラスメートと一緒に授業の中で英語を使うからこそ見られる笑顔もあります。ですので、これからも生徒の安全面を最優先にしつつ、やはり対面だからできることを少しずつ増やしていきたい

と考えています。

ダニエルズ：かえつの場合は、去年 G Suite が学校に導入されました。ですので、生徒全員が Google アカウントとかえつの E メールアドレスを持っていました。私が担当している高 1 では、今年から全員の BYOD（Bring Your Own Device）のプロジェクトが始まっていて、自分の機械を全員が持ってくる準備が整っていました。

そのような中、2 月末か 3 月の頭に学校がオンラインになりました。4 月には全員が G suite を使うことができる状態でしたが、先生と生徒がまだ慣れてない部分がありました。ですので、まず 4 月からゴールデンウイークまではオンライン授業にして、先生と生徒全員が機械に慣れることができるような授業を行いました。

5 月から 7 月 31 日まではほぼフルスケジュールで、月から金の 1 日 6 つ、各 40 分授業をセッティングしました。4 月のうちに多くの先生が Google Classroom などのいろんな機能に慣れることができるようになってきました。school Takt などのソフトも使い、いろいろな先生とワークショップをやったりしてコミュニケーションをしてきました。

「こういうこともできるよ、ああいうこともできるよ」という感じで、各教科、各学年でも話ができるようになりました。簡単なアンケートを取ってみると、やろうと思ったカリキュラムができていると答えた先生が 8 割ぐらいになっていました。例えば、数学の先生は黒板がわりに iPad をうまく使っていましたし、英語の先生もブレイクアウトルームをうまく使ってプロジェクトや、ペアワークとグループワークもうまくできました。

また、もっと大きいクラスでのスパイダー・ウェブ・ディスカッションも Zoom でうまくできました。ですので、オンラインになっても普段やっていることがほぼできたというクラスが多かったと思います。もちろん不安なところもいっぱいありましたけど。

植松：広尾学園では、4 月の当初からオンラインで授業がスタートしました。朝礼から 6 限まで通常の時間割どおり授業を実施しました。不便もありましたが、体育の先生もオンラインを上手に工夫して使いながら授業を展開していたと思います。グループディスカッションも、Zoom や Meet をいろいろ使いこなして、グループワークができていたように思います。

2.3　オンライン授業、対面授業それぞれの長所と短所について

新多：オンライン授業、対面授業それぞれの、長所と短所をどのように感じられておられるでしょうか。

正頭：ざっくり言うと、リアルの対面でしかできないことってあんまりないとは思います。ほんとにざっくり言うとですが。細かいところはいっぱいありますが。

ですので、オンラインのメリット、オフラインのメリットというディスカッションはあんまり意味がないと思っています。むしろオンラインのことの方が、1 対 n でできるので、たくさんできることが多いだろうなと思います。

ただ、現場の先生方があんまりオンラインが好きじゃない理由の 1 つに、モチベーションの問題があると思います。子供たちが 100％モチベーションがある状態だったら、オンライン、オフラインってあんま関係ないですよね。だけど、やっぱり子供たちは子供だから、その日によって、会う友達によって、先生と顔合わせることによって、さまざまな諸条件、変数によって、簡単に上下しちゃうのが子供たちです。そのモチベーションコントロールというところが、オンラインでは結構難しいかなと思っています。ですので、そのモチベーションが一番キーワードになってくるかなと感じています。

小泉：オンライン授業をした後に生徒にアンケートを取りましたが、意外にも 9 割以上の生徒が肯定的な意見でした。中でも目立ったのが、やはり動画はずっと残るものなので、いつでも見返すことができる

という理由が挙げられていました。これは事実で、例えば最初の週にアルファベットの音読みを1つずつ説明しました。教科書の音読をしていてうまく発音できない音があると、その動画に戻って音の発声の仕方を確認することができます。特に、今は授業中マスクを取ることができないので、口の形を示すことができません。ですので、映像授業のときに作った動画が今も役に立っています。

しかし、やはり英語は実際に他の人と一緒に使う経験を重ねることで力が付いてくると思っているので、一方的に配信するだけで、生徒の顔さえ見えない映像授業は最低限の教育を提供しているにすぎないかなと個人的に感じています。もちろん双方のやりとりができる、リアルタイム型のオンライン授業であれば事情は変わってくると思いますが、やはりそれでも隣に仲間がいて、同じ環境を共有して、その場で一緒にやりとりを行ったり協力したりしていく経験を積み重ねてこそ、本物のコミュニケーション能力が培われるのではないかと思います。

やはり人はコミュニケーションを取るとき、聞こえてくる言葉だけでなくて、その人の様子をよく観察して、困っていたら助けますし、言葉には出てこない本当の気持ちを察しようと、微妙な変化を感じ取りながらコミュニケーションすると思います。ですので、例えば声のトーンとか表情の微妙な変化などは、リアルタイム型のオンライン授業でも察するのが難しいのではないかなと感じます。

言語面と非言語面の両方の力を育ててこそ、思いやりがある国際人に育っていくのではないかと信じています。その両方を育てることができるのは、やはり実際に人との関わりの中で、どう言葉を使えばいいのか学ぶ経験を積み重ねることができる、それが対面授業なんじゃないかなというふうに思っています。

ダニエルズ：かえつで、今ネイティブの先生が私を含めて9人います。何かの会議の中で先生たちに、オンラインとオフラインのハイブリッドになって、何か変化があったかちょっと聞いてみました。もちろん、ICTスキルが一気にレベルアップしたところはすごく良いところですが、他によく聞かれた意見は、今まで普通の授業でプロジェクトをするとあんまり発言してなかった生徒が、オンラインになって急に宿題とかワーク、プレゼンテーションをすごくうまくやったりすることがあるということでした。

ですので、学校が対面授業になっても、オンラインでもできるようなワークが大切だとすごく感じています。あまり発言しない生徒にもフィットするような勉強の場をつくることはすごくよいことだと思います。

植松：どのような授業を展開するのかということもあるとは思いますが、受け手となる生徒がどちらが好きなのか、対面が好きなのかオンライン授業が好きなのか、生徒の特性によるかなと思いました。また、教科の特性にもよるかと思います。やはり実技教科は対面がやりやすそうでした。一方で、数学など問題を幾つも重ねて実力を付けていく科目に関しては、どちらであっても教員の頑張りと、生徒たちの努力が相まって、例年と変わらない力を付けられたように思います。

5月に、広尾学園のインターナショナルコースの生徒たちは、アドバンスト・プレイスメント（AP）という、アメリカの大学レベルのテストを受けますが、昨年の平均点と今年の平均点がほぼ変わらず、中には少し上がったものもありました。ですので、オンラインであっても質が保たれていたと言えます。

2.4 英語教育を通じて児童・生徒たちに身につけてもらいたい力

新多：今回のシンポジウムのテーマでもありますが、英語教育を通じて、どんな力を児童、生徒に身に付けてもらいたいとお考えでしょうか。

正頭：学校全体の教育として、いろんなことにチャレンジできる子を育てたいなと思っています。その中で数学の力が役立つこともあれば、国語の力が役立つこともあり、その中で英語の力が役立つこともあ

るだろうなという認識の中でやっています。

英語教育だけで何かを完成させようと思ったことはありません。中には英語を使って、自分の挑戦を続ける子もいるだろうと思ってやっている感じです。ですので、英語はそれを伝えるための手段の1つであって、全体として育てたいのは、子供たちがいろいろなことに失敗を恐れず挑戦できること。それが、ずっと昔から変わらず掲げてる僕の信念かなと思います。

小泉：このシンポジウムのテーマでもありますが、やはり生徒に未来を幸せに生き抜く力を付けてもらいたいと思っています。先ほどお話にもありましたけれども、やはりこれから生徒たちが生きる未来には、地球規模でさまざまな問題が複雑に絡み合って、知識だけでは解決できないことや、1人だけでは答えが出ないことが今よりもさらに増えると考えられます。

グローバル化がますます進む中、さまざまなバックグラウンドを持った人たちと一緒に物事に取り組んで、新しい課題を解決していくことが求められると思います。その中で、周りに流されるのではなくて、しっかりと自分の意見を持って発信できる、同時に自分と異なる意見があったとしても、それを単に否定するのではなくて、1つの意見として受け止めて、周りの人たちと一緒に協力して、最善の答えを導き出せるような、そんな力を付けてもらいたいと思っています。

英語の授業の中で、お互いに意見を伝え合ったり問題を探し出したり、他者と協力して課題を解決するといった活動全てが、きっと生徒たちにとって、これから将来英語を使う場面の疑似体験になると信じています。私は生徒たちには、単なる語学が堪能な人ではなく、その場を動かしていけるような人間力を兼ね備えた国際人になってもらいたいと願っています。ですので、そのためにクラスメートと一緒に、授業の中で英語を使う経験を通して、人との関わりの中でどう言葉を使っていくのを学び取っていってもらいたいなと願っています。

ダニエルズ：すごく難しい質問ですね。5年前に聞かれたら、多分答えが変わったと思います。そして、5年後にまた聞かれると、また答えが変わると思います。それでも、ベースはほぼ一緒で変わらないかなと思います。

かえつが大切にしていることが3つあります。まずは「学び方を学ぶ」。次に、「自分軸を確立する」。もう一つは、「共に生きる」です。この3つを大切にするプログラムを今かえつで作っています。

私の英語のクラスでどうやってそれらが英語に入ってくるかと言うと、まず将来の自分にとって英語が必要か必要でないかというより、グローバル社会で、常に英語が必要になると考えてもいいと思います。そして、その機会に自分が出会ったときにどう向き合うか。例えば、中学校、高校の英語の学びがすごく楽しくて、うまくできなかったことがあっても英語の授業楽しかったねっていうことが心に残っていれば、機会が目の前に現れたときに頑張ることができます。何かをつかもうとする時に、ポジティブに向きあうことができます。各教科の先生としては、それがまずベースです。やっぱり英語が苦手でバイバイしてしまうと、すごくもったいないと思います。

2番目は、コミュニケーションを大切にしたいということです。日本語でコミュニケーションすることと、英語でコミュニケーションするのとはちょっと違います。それを比較し、もう少しメタ認知力を働かせると、世界にはいろいろなことがあることが理解できます。自分の今までの当たり前が少しずつつぶれて、失敗しながらちょっとずつ自分が成長することがすごく大切だと思います。

最後は、英語の勉強をしながら、自己実現ができると、世界をもう少し素直に見ることができるようになります。特に今の時代はSNSやいろんなことがあり、マーケティングもいろんな方法があります。その大変な世界で、自分が誰なのか理解できるような学びができるのが一番の理想だと思います。

植松：英語教育を通じてということもありますが、小中高の教育を通じて、日本の大学でも海外の大学でも、世界中の大学を選択肢に入れられるぐらいの力を付けてほしいと思っています。いったんそういう力

を付けて海外の大学での学びをすることができれば、大学卒業後も世界規模で自分の活躍の場を見つけようという視点になっているのではないかと思います。

そういう規模で考えて動ける勢いや心意気を持っていれば、何かやりたいものを見つけて動きだしたいと思ったときに、周囲からサポートを得たり、周囲を巻き込んでいく力を身につけているだろうと思います。それが今日のシンポジウムのテーマになっている、グローバル社会で生き抜く力なのではないかと思っています。

新多：外国語教育を取り巻く環境は、たくさん大きな問題がありますが、さまざまな場所で、同じような思いを持って日々活動されておられる先生がたくさんおられるということが分かり、私自身もすごく勇気付けられました。きっと今日ご参加いただいた方の中にも、同じような思いを持っていただいた方がおられるのではないかなと思います。今日感じたことを大切にして、また新しい挑戦をしていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。